

公開対談シリーズ第14回
NINAGAWA 千の目

両演出家の間に漂う、舞台を創ること、そして観客に手渡していくことへの真剣さから流れる空気。それは限りなく透明で、願いに満ちたものとして、その日の対談会場を包んでいた。

(財)埼玉県芸術文化振興財団 芸術監督・演出家

振付家・演出家

蜷川幸雄 × 天児牛大

海外という異文化の中で“演出”を行う、ということ

蜷川 (以下N) 今日外国から帰ってきたばかりの天児牛大さんをお迎えしております。天児さんは世界を舞台として活躍している優れた舞踏の踊り手であり、演出家です。若い頃からの僕の友人です。どこから帰って来たのですか。

天児 (以降A) フランスからです。3月はじめにリヨンの国立歌劇場で新作オペラ『Lady SARASHINA』という、「更級日記」をモチーフとした作品を演出しました。その後5月パリの市立劇場で、2年ぶりに山海塾の新作を発表しました。蜷川さんは年間11本なされていますが、私はこの2本であっぴあっぴです(笑い)。

N もっとやってください。海外でやる場合、芝居でもよくあるのは論理的に要求されて、それを説明しないとなかなか先に進まないことです。僕もすごくあったのですが、ディスカッションは多いですか。

A 余り多くないです。話しだすときりが無い。“なぜ”ということが始まると、“なぜ”で時間がどんどん過ぎていきます。ある意味ではそれも彼らにとっては大事なこともかもしれないですが、リハーサルの時間は限定されていますからね。その間ディスカッションだけをやってしまったら実際の進展がなくなるので、極力そういう場合には僕がその動きをやって見せてしまうようにします。そして時間外でどういうところに問題があるかを聞いたりする形で進みます。

美しくいいものは大事にして、皆さんに育てていただかないと持続できないものなんです(蜷川幸雄)

N 本当に異文化同士の出会い方を語っていたら、何時間でも語れますよね。感情的になることはないのですか。

A それはないですね。それは蜷川さんの特権でしょうけれど(笑い)。感情的になってぶつかるよりは、なぜかということの中から引き受けるようにする、それはあります。ぶつかるのは簡単です。でもそういうところで自分のポジションだけを決めていくような主義主張を言っただけでは、互いに曲げないではないですか。僕はそこは手前で止めて、「どうなのかな?」と考えた方がよいかと思うのです。

N 来たね～え! 人間的に出来ているんだよ。僕なんか、すぐ怒っちゃうよ(笑い)。

二人の演出家が「認め合うこと」、そして「願うこと」

N 新しい体験、嫉妬するようなイメージの舞台が天児さんの舞台にはあります。あるとき驚いたことがあったのは、蓮の花です。僕が蓮をやると決めていて、彼の舞台を見に行ったら蓮の花が舞台にあって、それが上に上がって行きやがるの。時々イメージがぶつかることがあるんだよね。

A 蓮は、逆に蜷川さんの芝居を渋谷に見に行った時に先に使っていたのですよ。その時に僕はすでに蓮を使うことを決めていて、美術も作り始めていたのです。あの時に蜷川さんに言いましたよ、「僕、次は蓮ですよ」と。あれは蜷川さんが先だったのです。でもその時には僕は決めていたということなのです。これだけは事実です(笑い)。

N 妄想が妄想を呼ぶものだ(笑い)。良きライバルとして、蓮の時には「あそこを上げていくんぞ!」と、これはショックだったんです。こんな美しいものがこの世にあるだろうか、と、しびれるわけです。さらわれていくような気がするわけです。

そういう関係でライバル心と、僕にはない“いい美学”を持っているなど思っている天児さんです。新作の舞踏は何という題の作品を作ったのですか。

A 今回の新作のタイトルは、『とばり』です。これは今年9月に北九州で、10月に東京で上演します。

N 新作は、いままでやっていた仕事と大きく狙いが違うところはあるのでしょうか。

A いつも言っていることですが、さほど違ってくるということはないのです。自分ではバリエーションに向かうつもりはありません。私の場合は2年に1本なので、その間も自分で気になったこととか、実際作っている過程の中で、「この部分はこういう方法、方向性もあるな。」ということ逆を逆にしていくような、そういう作業に近いのです。

N 2年に1本なんだ。俺1年に10本ぐらいやっている。

A そういった意味では2年に1回の新作をプロポーズしてくれたパリの市立劇場には、本当の意味で感謝しています。新作と以前の作品の二本立てです。契約は毎回で、長期契約ではない。それでも何とか続いて来られました。

パリの市立劇場で26年間、2年ごとに12回やりましたが、ディレクターから次の作品はこういう傾向がいいのではないかと言われたことが一度もないのです。全くないのです。ただ決まっているのは、結果論だけです。次の作品に対して何を自分が切り口として出すか、それに対してどうなのかという問い、そしてそこに自分を先鋭化させ集約させていだけ。何を自分で包括していればいいのか、それだけです。しかしそれは、意外にクリアーで厳しいですね。

N その厳しさは結構すごいですから。ペーター・シュタインの作品もエジンプラのフェスティバルで1年目、2年目に絶賛されたチェホフでも、3年目は途中でお客さんがぞろぞろ帰ってしまっ

A ヨーロッパの公共劇場やフェスティバルは、税金ないしはファンで支えられています。ですから、それらを支えているのは我々であるという考えが観客のベースにありますね。さらにチケットは自分で払うから、それを自分が買うということの主張は非常に厳しいと思います。ある意味では彼らはものを獲得したい、だけど拒否権を持っているわけです。そのあたりが舞台に向き合う時の自分の感性をより高めていこうという姿勢かと思うのです。それで観客自身がそれに対して、ノーという答えを出す時にはたぶん客席を立ていくのだと思います。これも一つの発言だと思います。

N 受け入れてくれる時もすごいですね。

A 個人で持っている、先ほどと同じような権利意識というか、自分を高めたいという出会いの場でもあるのだと思います。丁々発止ということにもなりますね。

N 文化的な差なものもあるし、ヨーロッパは冬寒いし、暗い時間が長いから劇場にでも行かなければ一日がつぶれないのではないかという気がします。でも劇場に行くという積極的な選択を得た結果、A点からB点まで行くということがものすごく大事なことで思っているのです。僕らはそれに値する、皆さんの労力に値する仕事をしなくてはいけないと思っていますので、是非劇場に行くということで応援していただけるとありがたいと思っています。今日は大事な話が出来たことに、天児さんに感謝して終わりたいと思います。



profile: 天児牛大 (あまがつうしお)
 山海塾主宰・振付家・演出家。1949年生まれ。75年に舞踏グループ山海塾を創設。80年より海外ツアーを開始し、世界43カ国にて公演を重ねる。オペラの演出も手がけ「青ひげ公の城」(97年・東京)、ペーター・エトヴェシュ作曲の新作オペラ「三人姉妹」(98年・リヨン)、そして今年3月には「更級日記」をモチーフとした同氏の最新オペラ「Lady SARASHINA」をリヨン国立歌劇場にて演出。また今年5月、パリ市立劇場、北九州芸術劇場との共同プロデュースにより、山海塾の新作「降りくるもの」なかで「とばり」を発表。今秋、2年半ぶりの国内ツアーを行う。
<http://www.sankaijuku.com>